

# 講演録

## 酒場詩人の流儀 ～旅と酒場とふれあいと～



2016年度  
関東支部総会  
特別講演

酒場詩人  
吉田 類 氏

### profile

よしだ るい 高知県生まれ。酒場や旅をテーマに、イラストレーター、エッセイストとして活動するかたわら、俳句愛好会『舟』を主宰。BS-TBSにて「吉田類の酒場放浪記」に出演。現在、出身地である高知県観光特使と仁淀川町観光大使を務める。「NHK俳句」「NHK短歌」「俳句王国」などのテレビ出演のほか、『酒場詩人の流儀』『酒場歳時記』『東京立ち飲み案内』『酒場詩人・吉田類の旅と酒場俳句』など著書多数。

### ● 酒場詩人の原点

「吉田類の酒場放浪記」というテレビ番組が、今年で14年目を迎えました。ただ普通にお酒を飲むだけという全く計算のないところがうけたようで、多くの方々から好評をいただいております。もともと私は全国を旅しながら、その地方の自然についての紀行やエッセイを書いていたのですが、夜になると地元のお酒を飲みながら郷土料理をいただく。その

スタイルをずっと続けていたので、お酒を飲んでいるイメージが圧倒的に強くなってしまい、単に「酔っぱらいのおっちゃん」と思っている方も多いように思います。しかし、最も長く親しんでいるのは俳句で、それに加えて散文詩や紀行などいろいろ書いており、本業は実は

詩人なのです。

私が生まれた高知県は自然が豊かで水もよく、「返杯」やお座敷遊びの「べく杯」など独特の飲酒文化を持つ土地柄です。子供でも神事の御神酒という形では幼い頃からお酒を口にすることはありますし、お祝い事では大人たちの酒宴が二晩や三晩続くことは当たり前で、お酒を飲むことに対して全く抵抗がない環境に育ちました。

海外で生活することが多かった若い頃は、西洋文化が一番と教育されたこともあり、飲むものもワインが主でしたが、30代後半にもなると、人は自然や自分の生まれた風土などに目を向けるようになるものです。東京

の下町で大衆酒場の魅力を知ってからは、そこになくはならない日本酒をもっぱら好むようになりました。

日本酒の魅力は、どんな料理や肴にでも合うところ。そこが、料理ごとに合う銘柄を選ばなければならないワインとの大きな違いだと思います。ですから、いろいろな日本酒を味わってみることが、日本酒を楽しむ基本です。さらに、最近では女性にも飲みやすいシャンパン系やワイン系など新しい日本酒もどんどん開発されています。ものづくりという観点から見ても、お酒は日本がトップのレベルにあるのではないのでしょうか。

### ● 酒場は人間力を鍛える学校

番組を見ている方々から、「どうすれば類さんのように、お店に入ってその場にすっとなじむことができるのか、そのコツを教えてください」とよく質問されます。

私は、何よりもまず「乾杯」が大事だと思っています。大衆酒場の特徴は、カウンターがコの字になっていること。お客さん同士すべての顔が見えるように作られています。常連さんというのは大抵、全体が見渡せる一番端にいるものです。初めてのお店に入った場合、カウンターの真ん中よりちょっと外したところに座るのがおすすめです。お店には実に様々な年齢や職業、経歴の方がいらっしゃいます。その中で、自分は関係ないという態度で飲んでいてはお酒もおいしくありません。目が合ったら必ず挨拶をして、笑顔で乾杯をする。そして、お店の方や常連さん、隣の人におすすみを聞くのです。それだけでコミュニケーションが広がっていきますから、次第にその場に慣れてきます。

「酒場放浪記」では、一軒のお店で約2時間の撮影時間を予定しています。お店にはもちろん撮影許可をいただいておりますが、お客さんたちは

何も知りません。撮影には結構時間がかかるもので、スムーズに和やかに撮影を進めるためにも入店した5分から10分の間に、大げさに言えば人心を掌握する必要があります。ただ、それができるのも、そこにお酒があるからこそ。楽しく乾杯できれば、皆が笑顔になり、一瞬でなじむことができるのです。

大衆酒場のすばらしさは、そこで自分のコミュニケーション力が鍛えられることです。人間力を磨くための学校だと言っても過言ではありません。その力が身に付けば、どこにいても通用する人間になれるのではないかと思います。

## ● 自然とふれあい感性を磨く

もう一つよく聞かれることが、「あんなに飲み続けているのに、どうして体がもっているのか」ということです。「酒場放浪記」はドキュメンタリー風の番組ですから、インチキは一切できません。お酒に強い体質ということもあるでしょうが、私は自分なりに必ず体を動かすように努めています。そして最も大切なことは、ストレスをためずに仕事をやらせていただいているということです。お酒を飲んだ後に俳句を作り、詩やエッセイを書くには切り替えが必要です。クリエイティブな作業をするための創造力やひらめきを得るには、五感を研ぎ澄ますことが不可欠です。そのために私は自然の中に身を置き、そこで体を動かすようにしています。感性を養うために自然にふれることが、いかに大切かを説く学説も増えているようですが、私はもともとそのようなことを意識していたわけではなく、自分がやりたいことを普通にやっていたら自然とそのような生活になっていたのです。

私は山歩きや溪流釣りが好きで、一時期は日本の中部山岳から北海道の利尻まで大自然の中にどっぷりつ

かっていたことがありました。単独で長期間山に入ることもあり、ほぼ野生動物と同じような体験をしていました。そこで磨かれた感性が身を守ってくれていると感じています。ですから自然の中はもちろん、言葉が全く通じない海外など、初めての場所に行ってもさほど苦労をしたことはありません。

最近、中高年の方々が物事への興味をどんどんなくしているという話を聞きますが、好奇心を刺激する材料は日本列島どこにでも山のようにあると私は思っています。特に私は昆虫が好きで、旅をしながら動植物の写真をよく撮りますが、都会でもマンションのベランダにオニヤンマがいたり、カナブンとスズメバチが道端で一騎討ちをしたりする場面に遭遇します。こんなにすごい宇宙が足元にある。それが日本なのです。このようなことに感動していると、飽きるということがありません。身近に知らなかったことで刺激を受けることはたくさんあります。野性を取り戻すためにも、自然とふれあうことは大切なことだと思います。

## ● 日本列島の奇跡の自然に感謝

自然と人間が当たり前で共存している日本は、世界でも稀な国です。私は、幻の魚、イトウを北海道の朱鞠内湖で釣り上げました。幻と言われている魚も、こんな身近な場所にいるのです。北海道では500kgを超えるヒグマが捕獲されることがありますし、本州以南ではツキノワグマが人家のそばまで餌を食べにやってきます。このように野生の猛獣と人間が同居し、希少な動物たちと出会うこ

とができるということは、世界的に見ても奇跡と言えます。私はこの日本列島の貴重な環境に、多くの人に目を向けてほしいと思っています。

自然の恵みは、食に関しても言えます。今、和食が世界中でブームになっていますが、日本の食が評価されているのも、この自然が前提にあるからです。豊かな自然があって初めていい水が出て、いいお米がとれて、いいお酒ができる。日本人の野性あふれる自然との上手なつきあいがあってこそ、うまい酒、うまい料理です。そのことが丸ごと評価され始めています。これは日本が持つ大き



な価値であり、世界にアピールできる魅力だと思っています。

酒場詩人として、山歩きと和食、特に飲酒文化を紹介することができるのも、豊かな日本の自然と文化があるからこそ。このように恵まれた日本列島を自由に旅し、おいしいお酒とたくさんのお酒を満喫させていただけることは、本当に幸せなことだと思っています。これからもどんどん飲んでいきますので、皆さん、どこかでお会いしたらぜひ乾杯してください。

\*

\*